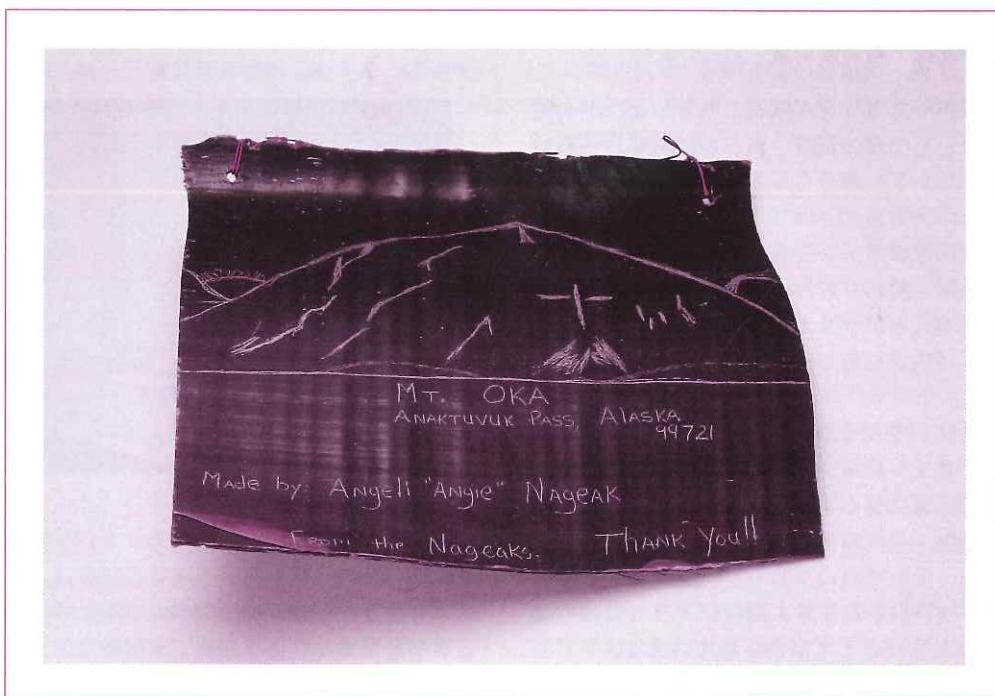




北方民族博物館だより

No. 110



D16.4.15 クジラヒゲ製壁掛け エスキモー/イヌピアック ア拉斯カ/アナクトブック・パス
16.5 x 14.0 cm 1960年（推定）岡正雄収集 Angeli “Angie” Nageak 製作

クジラヒゲで作られた壁掛けである。岡正雄は戦前・戦後日本の民族学を主導した社会民族学者である。岡は1960年、明治大学創立80周年記念のアラスカ学術調査に民族学班の班長として参加し、その後もくりかえしアナクトブック・パスを訪れた。岡は現地の住民の間でも人気者で、この壁掛けは住民が、アナクトブック・パス近郊の山の一つを「マウント・オカ」と命名した記念に贈られたものだという。

目次 Contents

- 1 表紙 クジラヒゲ製壁掛け
- 2 - 3 第33回特別展「North to the Future 北方から未来へ—日本人が出会ったアラスカ」
／講座「北方アサバスカンの狩猟と名誉」
- 4 ロビー展「森と川の民ウデヘ—ウスリータイガの狩猟文化と工芸」
／講座「東シベリアと日本の狩猟文化」
- 5 館長講座「コトバがなくなる?! 言語の危機と博物館のかかわり」
／コンサート「カザフ民族音楽コンサート」
- 6 INFORMATION

第33回特別展

North to the Future

北方から未来へ －日本人が出会ったアラスカ

2018.7.14-10.8

会場：北方民族博物館・特別展示室

日本人にとってアラスカはどんなところでしょうか？美しい大自然、それとも極寒の荒野、あるいは美味しい寿司ネタの宝庫でしょうか？おそらく多くの方にとってアラスカは「どこか遠いところ」といったイメージがあるかと思います。しかし、そのイメージとは反対に、日本人は歴史的にアラスカと深い関わりを持ちました。

本特別展では日本人とアラスカの関係を、特にアラスカ先住民との関わりに焦点を当て、その歴史を紹介しています。

アラスカには大別して、4つのグループの先住民が暮らしています。①アリューシャン列島のアリュート、②北部、西部、南西部の海岸域に暮らすエスキモー、③南東部沿岸域の北西海岸先住民、④内陸部の北方アサバスカンです。アリュートを除き、それぞれのグループは言語によってさらに複数のグループに分かれます。現在、アラスカ州では20の先住民言語が公用語として認められています。

こうした先住民と最初に遭遇した日本人は、江戸時代後半の漂流民たちだと考えられます。海運が発展した江戸時代、事故によって太平洋各地に流される漂流が多発します。こうした漂流民の中にはアリューシャン列島に漂着するものもいました。

アリューシャン列島に漂着した漂流民がいる一方で、アラスカ本土に直接漂着した日本人がいたという記録は残っていません。しかし、漂流し、外国船に救助された後に、アラスカのシト力に連れていかれた漂流民たちがいました。彼らの一部は、帰国後に現地で目撃した先住民（アリュートやトリンギット）の姿を日本に伝えました。漂流民たちは鎖国下の日本において、外国の貴重な情報をもたらしたものと考えられます。

明治時代に入ると、自らの意志でアラスカに渡る人物が現れます。広く知られている人物として、小説家新田次郎に取り上げられた「フランク・安田」こと安田恭輔と和田重次郎がいます。両者はゴールドラッシュの時代のアラスカで、先住民社会とも深い交流を持ち、大きな活躍を見せました。本展は、和田重次郎の子孫にあたる和田利百氏（愛媛県）、国立民族学博物館の協力により、明治～大正期に日本人によって収集されたアラスカ先住民資料を多く出展しています。

昭和に入ると、太平洋戦争を前にし、日本とアメリカの関係は緊張していきます。アラスカは日本から近いということもあり、日本に対する警戒が特に強まった地域と言

えるでしょう。

昭和17(1942)年6月、日本軍はアリューシャン列島のアツツ島とキスカ島を占領し、同年9月には、アツツ島に居住していたアリュート40名を北海道・小樽に連行し、終戦まで抑留します。アリュートの小樽での生活は食料事情が良好でなかったことから結核が蔓延し、終戦までに16名と、小樽で生まれた子供の多くが亡くなりました。今年、2018年は日本兵の多くが戦死した「アツツ島の戦い」から75年目にあたります。



展示解説の様子

戦後に入ると日本とアラスカの関係は大局的には好転していきます。昭和35(1960)年、明治大学の創立80周年記念事業として、戦後はじめて本格的なアラスカの学術調査が実施されました。この調査団は地理学、民族学、考古学の3つの班から構成されており、民族学班の班長であった岡正雄など、当時を代表する研究者が参加していました。

また、当館2代目館長であった岡田宏明はこの調査の考古学班に参加し、続く第2次、第3次調査には民族学班の一員として参加しました。岡田宏明を含め、この調査はその後の日本のアラスカ研究の中心となっていく人材を育成したと考えられます。本展では、明治大学経済学部と岡正雄のご子息である岡千曲氏より寄贈された当時の資料とともに、1960年の調査をふりかえっています。

岡田宏明は、当館第4代目館長の岡田淳子とともに、1970～90年代のアラスカ研究を主導した一人でした。二人の調査はアラスカ西部、南西部、南東部を中心に、エスキモーやトリンギット、ツイムシアンなどのアラスカ先住民とも深い関わりを持ちました。特に昭和47(1972)年から昭和59(1984)年まで、断続的に行われたホット・スプリング遺跡の発掘調査は高く評価されており、1989年に「環太平洋先史会議(Circum-Pacific Prehistory Conference)」、また2002年にはアラスカ人類学会により、その功績が顕彰されています。本展では岡田チームの軌跡を岡田淳子氏より寄贈された資料を中心に紹介しています。

1960～70年代以降は学術研究以外にも、アラスカと日本の関わりが深まっていきました。1964年にアラスカ州はアメリカの州として初めて在日事務所を開設しています。また1975年には新田次郎の『アラスカ物語』が映画化され、

フランク安田の人生が、より多くの方に知られるようになります。さらにこの時代、アラスカへの観光も盛んになっていきます。このようなアラスカへの関心の高まりを、アラスカ州政府日本支局から寄贈された資料や、アラスカ物語の映画ポスター、パンフレットから紹介します。

現在、複数の研究者がアラスカに通っています。本展では当館とも関わりが深い3名の研究者（井上敏昭氏、近藤祉秋氏、平澤悠氏）に依頼し、近年の研究動向をパネルとスライドショーにしていただきました。また、井上氏、近藤氏によって収集された資料から、現在の研究者とアラスカの人々の交流を紹介しています。

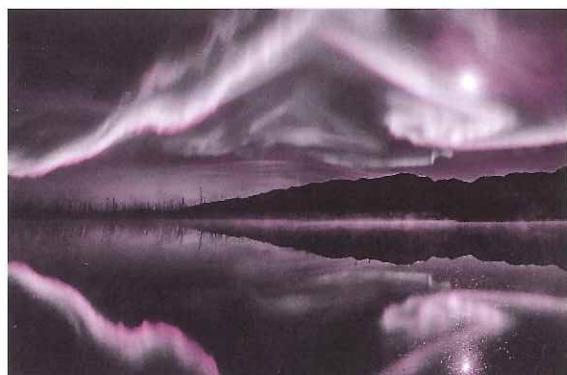
現在、アラスカの人々と積極的な交流を行なっているのは研究者だけではありません。フランク安田の生地である宮城県石巻市の市民は、フランク安田が作ったアラスカのビーバー村の住民と密接な交流を続けています。

2008年、フランク安田の没後50年を追悼する式典「フランク安田メモリアルポトラッヂ」がビーバー村で開かれました。石巻ではこのポトラッヂ実施にむけた実行委員会が結成され、多くの市民がビーバー村を訪れました。その後も、ビーバー村から修学旅行生が石巻に訪れるなどの発展をみせています。

本展で紹介しているように、日本人は歴史上、アラスカの人々と深く関与してきました。現地社会で高く評価される人物がいた一方で、戦争など悲しい記憶も歴史に刻まれています。本展が今後のアラスカとの関わりを考えるきっかけとなれば幸いです。

7月14日（土）、本展のオープニングセレモニーのあとに、本展のチラシ、ポスター、図録表紙、展示パネルなどに写真を提供してくださったオーロラ写真家、オーロラ・メッシュセンターの中垣哲也氏をお招きし、「オーロラ上映＆トークライブ」を開催しました。

アラスカに70回以上通われている中垣氏の写真、映像は圧巻で午前の部、午後の部ともに満席での上映会となりました。来館者の多くが中垣氏の美しい写真や、オーロラにまつわる様々な話題に心を奪っていました。



『ドットレイク』 撮影：中垣哲也氏

(学芸グループ 野口 泰弥)

特別展関連講座

北方アサバスカンの狩猟と名誉

2018.7.21

講師：近藤祉秋氏（北海道大学アイヌ・先住民研究センター・助教）
野口泰弥（当館・学芸員）

特別展の関連事業として、北海道大学の近藤祉秋氏をお招きして、野口と共同で講座を行ないました。

本講座は2部構成とし、前半を野口が担当しました。野口の発表は、近藤氏との共同研究に基づき、アラスカ/ユコン地域の北方アサバスカンに特徴的な銅製のダガー（両刃ナイフ）を考察しました。

本講座で対象としたダガーは棒に取り付けて槍としたうえで、クマ狩猟に用いられることもありました。槍によるクマ狩猟は危険も多く、北方アサバスカンの多くの社会でハンターとしての名誉に深く結びついていました。本発表ではダガーは狩猟具でありながら、名誉に結びつく威信財でもあるという仮説を提示し、その仮説を様々な観点から検証しました。

近藤氏の発表は、前半の内容を踏まえ、近藤氏が長年調査しているアラスカ・ニコライ村での狩猟文化と宗教、名誉の結びつきを検討しました。考察はデビアン・ワシリヤ（1883-1963）という、ニコライ村のかつての第一チーフが、ダガーを手にしている写真が、なぜ撮影されたのかという問い合わせから始まります。

ニコライ村は北方アサバスカンのアッパー・クスコクイム（近藤氏は自称に基づきディチナニク人と呼ぶ）が住民の多数を占める村です。住民の多くはロシア正教を信仰しています。

1910年頃、チーフ・ニコライの野営地付近にロシア正教の教会が建設され、その後、疫病の流行により人口が激減する中で、人々がこの野営地に集まるようになりました。ニコライ村が成立しました。

ワシリヤは青年期に、それまでの遊動的なバンド社会から、村落への定住という大変化を経験しました。しかし、社会変化があっても、狩猟文化が社会の基盤であることは維持されました。ワシリヤはニコライ村の第一チーフとロシア正教のまとめ役を兼任していました。近藤氏によればワシリヤは、伝統的な権威の基盤である「腕の良い獵師」であることを維持しながら、ロシア正教を受け入れることで村の安定的運営をしていました。例えばこの時代、教会は「獵友会」のような機能を果たしたといいます。奉神礼（カトリックでいうミサ）の後には、取りまとめ役の家に集まって、狩猟の方針などが議論されていました。

これによってワシリヤがダガーを手にした写真は村のリーダーとしての政治的/宗教的権威の源泉が、狩猟にまつわる名誉であったことを示唆していると考えられます。

(学芸グループ 野口 泰弥)

ロビー展

森と川の民ウデへ —ウスリータイガの狩猟文化と工芸

2018. 6. 2～7. 1

ロシア・沿海地方は、日本海を挟んで北海道の対岸に位置し、気候や植生も北海道に似ています。常緑針葉樹と落葉広葉樹が混生するこの地域の原生林は「ウスリータイガ」と呼ばれ、貴重な生態系が残されています。先住民ウデへは、この森で野生動物や魚を捕り、自然とともに暮らしていました。本ロビー展では、絵画や工芸品をとおしてウデへの狩猟文化を紹介しました。

最初のコーナーでは、ウデへの狩猟道具や森のなかに仕掛けられた罠を描いた水彩画を展示しました。交易品とする美しい毛皮を傷つけずに毛皮獸を捕るために、ウデへはさまざまな工夫を凝らした罠を利用してきたのです。これらの水彩画は、ロシア科学アカデミー極東支部のアトーリ・スタルツェフ研究員から寄贈されたもので、寄贈者が自身の研究成果を基に描いたものです。

次のコーナーではウデへの伝統的な衣類とさまざまな工芸品を紹介しました。動物の骨と毛皮で作った人形、魚の骨を材料としたネックレス、白樺樹皮製の塩入れなど、工芸品の多くは自然の素材から作られています。

展示室中央には、ウデへの木彫家ウラジミル・スリヤンジガ氏の作品7点を展示しました。氏は野生動物やウデへの伝統文化をモチーフとした作品を発表しています。

最後のコーナーでは、イワン・ドゥンカイ氏が本の挿絵として描いた水彩画18点を展示しました。ウデへの伝統的な生活や狩猟の様子などが描かれており、ウデへ文化の一端を知ることができます。

本ロビー展の観覧者は2,853名となりました。また関連講座として、講座「東シベリアと日本の狩猟文化」（右記）のほか、6月2日には館長講座「コトバがなくなる？！言語の危機と博物館のかかわり」、6月9日には展示解説会がおこなわれました。



ロビー展展示解説会の様子

(学芸グループ 中田篤)

ロビー展関連講座

東シベリアと日本の狩猟文化

2018. 6. 10

講師：田口洋美氏（東北芸術工科大学・教授）



講師の田口洋美氏

狩猟文化研究の専門家で自身が狩猟免許を持つハンターでもある講師に、ウデへを含む東シベリアの先住民と日本のマタギの狩猟文化の特徴、共通点や関連について解説いただきました。

東シベリアやロシア極東地域では、個人狩猟者による小型毛皮獸が、日本ではマタギと呼ばれる狩猟者の間で大型獸を対象とした集団獵が発達してきました。基本的な狩猟技術は共通しているにもかかわらず、これらの地域の狩猟文化は大きく異なっているように思われます。

東シベリア・ロシア極東地域は、寒冷な気候のため農耕には適さず、そこに暮らす先住民の生業は、狩猟・採集や漁労が中心となっていました。また、この地域は中国やロシアといった大国の毛皮交易圏に含まれ、その強い影響を受けてきました。そのため、この地域では毛皮獸の狩猟が発達し、交易品となる毛皮を傷めないように工夫された多様な罠が使用されてきました。

一方、より温暖な日本の山間部では、季節ごとに農耕、山菜などの採集、狩猟を組み合わせた複合的な生業が営まれてきました。狩猟はかつては肉や脂、毛皮を得るためにおこなわれていましたが、18世紀以降、漢方薬の材料として熊の胆の市場価値が高まると、換金用の資源としてクマが重要な獲物となっていました。

もともと共通した基盤を持っていた両地域の狩猟文化は、地域の気候、地形などの自然環境のほか、毛皮交易の影響や獲物の市場価値など、重層的な政治的・経済的環境の影響によって大きく異なる姿となったということです。

講座では、地形や森の景観、狩猟具のほか、講師が参加した狩猟の様子を撮影した現地写真など、多数の資料を使い、講師自身の豊富な体験談を交えて熱心に解説していただきました。

(学芸グループ 中田篤)

館長講座

コトバがなくなる？！ 言語の危機と博物館のかかわり

2018. 6. 2

講師：津曲敏郎（当館館長）

今、かつてない速さと規模で世界中から小さな言語が失われつつあります。今回の講座は、その現状を認識し、コトバがなくなることの意味と、博物館とのかかわりについて考える機会としました。はじめにクイズ形式で、世界の言語の数、話者数1万人以下の言語の数、話者数100万人以上の言語の数、100年後の言語の数、そして日本語の話者数のランキングについて考えてもらいました。世界には約6千の言語があるが、そのうちの半数は話者数1万人以下の小さな言語であり、これらは今後100年以内に消滅するとみられていること、100万人以上の話者をもつ「大言語」は全体の4%程度に過ぎないものの、これらの言語のどれかを世界人口の実に96%の人が使っていること、などが紹介されました。もちろん日本語も大言語の一つであり、話者数の点で世界9位ぐらいに位置します。こうした事実は多くの人にとってあまり覚えてみられることはありません。大多数の大言語話者にとってはしょせん「他人事」だからと言えますが、実は身のまわりから地域の方言が消えつつあるのも本質的に同じ問題です。

こうした地域方言や少數言語がなくなるのは、近代化とグローバル化の中でやむを得ない面があり、むしろ伝達効率や社会での役割という点からすれば、標準語や大言語に乗り換えるのは自然な流れです。しかしながら、コトバは単に伝達の道具にとどまらず、民族のアイデンティティの一番の証であり、人類の知的遺産でもあると言えます。固有の言語を失いつつある人たちの多くも、できることならなくしたくない、という気持ちを持っています。

実際問題として、親から子への継承の途切れた言語を本当の意味で「復興」させるのはきわめて困難です。現実的かつ持続可能な道は「保持」、つまり可能な限りの記録を残し、固有言語に価値を認め、その関心を維持することです。そのために、博物館ではモノと合わせたコトバの集積や地域との連携などが可能であることにも触れました。



会場の様子
(館長 津曲 敏郎)

コンサート

カザフ民族音楽コンサート

2018. 7. 1

出演：ブケンバイ クグルシン氏（ドンブラ奏者）

西村幹也氏(NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがあ)

ユハンヌス～夏至まつり会場の一角で、カザフ民族楽器「ドンブラ」（ギターに似た弦楽器）の演奏と歌のコンサートを開催しました。

カザフは、カザフスタンを中心に、中国、ロシア、モンゴルなどに暮らす民族です。演奏者のクグルシン氏は、モンゴル在住のカザフの青年で、ドンブラ奏者の父のもとでドンブラの演奏を習得し、幼い頃から父とともに観光客などの前で演奏経験を積む一方、地元の歌謡コンクールなどで優秀な成績を収めてこられました。ここ数年、演奏家として次第に名前が知られるようになり、2017年にはカザフスタンや中国に招かれて演奏活動をおこなうなど、活動の場を広げています。また、このコンサートは、モンゴルの文化に関する情報発信を目的に設立されたNPO法人「北方アジア文化交流センターしゃがあ」によって企画されたものです。

コンサートはNPO法人理事長の西村幹也氏による司会・進行でおこなわれました。まず、クグルシン氏の経歴や二人の出会いのエピソードなどが紹介された後、さっそく演奏が始まりました。ドンブラの弦は二本ですが、クグルシン氏の手にかかると、それを忘れるほど豊かな音色が奏でられます。また、力強く、伸びのあるクグルシン氏の声は、博物館の周囲の森に響き渡るようでした。

演奏の合間に、西村氏によって、カザフ語の曲名や歌詞の内容が解説されたほか、牧畜や装飾文化など、カザフの伝統的な文化やモンゴルに暮らすカザフの歴史などが紹介されました。

当日は、あいにく今にも雨が降りそうな天気でしたが、コンサートを目的に来られた方だけでなく、夏至まつりに訪れた方も、カザフの音楽を楽しんでいた様子でした。



ブケンバイ クグルシン氏
(学芸グループ 中田篤)

第33回北方民族文化シンポジウム 網走 「環北太平洋地域の伝統と文化 カムチャツカ半島・千島列島」

北太平洋を取り囲む地域は、自然環境や生物資源だけではなく、文化的にも類似性や共通性が指摘されてきました。本シンポジウムでは、環太平洋沿岸の地域ごとに先住民文化の特徴や変遷、現状を総合的・学際的に比較・検討します。今回は、対象地域としてカムチャツカ半島・千島列島を取り上げます。

- 日程 平成30年10月6日(土)・7日(日) 各日9:00~16:00 【参加無料】※レセプションは会費5000円
- 会場 オホーツク・文化交流センター(エコーセンター2000) 大会議室 [網走市北2条西3丁目/TEL.0152-43-3704]
- 発表者 E.カステン(シベリア財團[ドイツ]/主任研究員)、B.フィットヒュ(ワシントン大学[アメリカ]/教授)、A.ヴァシレフスキー(サハリン国立大学[ロシア]/教授)、高瀬克範(北海道大学文学研究科准教授)、麓慎一(新潟大学/教授)、川上淳(札幌大学/教授)、永山ゆかり(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター/共同研究員)、小野智香子(千葉大学人文公共学府/特任研究員) ■コメンテーター 岸上伸啓(人間文化研究機構/理事)、吳人惠(富山大学/教授)
- 運営委員 大島稔(小樽商科大学/名誉教授)、中村和之(函館工業高等専門学校/教授)ほか
- ◇関連事業:ドキュメンタリー映画「kapiwとapappo~アイヌの姉妹の物語~」上映会
- 日程 平成30年9月19日(水) 18:00 開場、18:30 上映開始
- 会場 オホーツク・文化交流センター(エコーセンター2000) エコホール

ロビー展 平取町立二風谷アイヌ文化博物館巡回展 「エカシの記憶を辿って~昭和のアイヌのくらし~」

2017年に平取町立二風谷アイヌ文化博物館で開催された展示の巡回展として、北海道平取町在住の「エカシ」川奈野一信氏のライヒストリーを通じて、これまで展示されることが少なかった昭和のアイヌの日常を紹介し、今を生きるアイヌの思いを示します。

- 会期 平成30年10月27日(土)から11月25日(日)
- 会場 北方民族博物館ロビー 【観覧無料】
- 展示企画者 吉本裕子(横浜市立大学/客員研究員)



川奈野一信氏

INFORMATION

行事報告

◆5月26日(土)はくぶつかんクラブ「土器づくり」(講師:平栗美紅解説員)を開催しました。



フラダンス披露の様子

◆5月27日(日)施設見学会「道立オホーツク公園・北方民族博物館施設見学会(担当:中田篤主任学芸員)を開催しました。



バスケットを作る参加者

◆6月23日(土)講習会「白樺樹皮のバスケット作り」(講師:山辺朋子氏)を開催しました。

◆7月7日(土)はくぶつかんクラブ「アザラシのヨーヨーブルと遊び体験」(講師:石原生久代解説員)を開催しました。

◆7月15日(日)解説会「特別展展示解説会」(講師:野口泰弥学芸員)を開催しました。

◆7月16日(月・祝)バイタルカ試乗体験を開催しました。



まっすぐ進めるかな?

◆7月28日(土)はくぶつかんクラブ「カラフルまが玉づくり」(講師:若山恵子解説員)を開催しました。

◆8月4日(土)はくぶつかんクラブ「北の動物で簡単ホワイトボードづくり」(講師:菅原章子解説員)を開催しました。

◆8月11日(土・祝)上映会「北方民族博物館シアター 夏」(担当: 笹倉いる美学芸主幹)を開催しました。

◆9月8日(火)はくぶつかんクラブ「革でつくるオリジナル手さげバッグ」(講師:石原生久代解説員)を開催しました。

調査報告

◆8月2日(木)~8月25日(土)野口泰弥学芸員がカナダ・ユーロン準州で現地調査を行いました。

北方民族博物館だより

No. 110

平成30(2018)年9月28日発行

編集・発行 北海道立北方民族博物館

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1

Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889

e-mail: tonakai@hoppohm.org

<http://hoppohm.org>

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会